

2022/11/10

大学コンソーシアム京都インターンシップ・プログラム
チャレンジつねよし百貨店実行委員会

テーマ：チャレンジつねよし百貨店実行委員会インターンシップ報告レポート

安達愛唯 田島幸音

【はじめに】

報告レポートを寄稿するにあたり、今回のインターン生として受け入れてくださった常吉百貨店実行委員会東田様、インターン活動をサポートしてくださった大谷大学野村先生、長期インターンシップ講義を開講並びに、サポートして頂いた大学コンソーシアム京都インターンシップ事業推進室様、また現地でのインターン活動において関わっていただいたすべての方に感謝いたします。

【プロジェクトの究極の目標とチーム目標】

私たちはチャレンジつねよし百貨店実行委員会行う、日本一小さな百貨店で考える持続可能な暮らしというプロジェクトのもと、想定される現状の課題、例えば、人口減少や過疎高齢化、子どもたちが学校外で学ぶ機会が少ないといった課題を整理し、受け入れ先である、つねよし百貨店東田さんの要望であった「地域に育つ子どもたちにとって有意義な未来のために」をプロジェクトの究極の目標に設定した。

私たちは、この究極の目標達成のために機会づくりの方針として、つねよし百貨店という固有のソーシャル施設を活用し、子どもたちの対話を通じて、相互の利益を得ることができる、子どもが自主的に動く取り組みを提供することとし、その上で、農村の有機的、無機的リアリティを感じる中で、具体案を固める方針をとった。

【企画予定】

企画をチーム方針のもとに成立させるには、まず、チームで実現可能性のある目標に適った企画を複数作成し、現地での訪問回数 2 回の内、1 回目の訪問にて作成した企画案をもとに、子どもたちと会議を行ったうえで具体的な企画案を決定し、2 回目の訪問にて決定した企画を実行するという方向でまとまった。

【企画案】

受け入れ先とのやり取りは、基本 ZOOM を介して行われたが、特に地域性や、地域環境、子どもたちのことを具体的に想定できないままに、企画案を考えた。企画の趣旨は主に現状の課題を整理と、子どもが楽しんでくれそうなものを融合する形をとった。企画案は次の通り、①子どもたちと、地域の特産品を提案してみることに、②有限的な資材を用いてモノづくり、③フィールドワークを兼ねた地域マップの作製、④豊かな自然からの材料を用いた秘密基地づくり、以上が当初私たちの提案した企画案であり、これらが1次訪問にて会議をするなかで子ども百貨店へと纏っていく。

また、1次訪問に子どもたちに集まってもらえる手段として、ポスター作りや大学生を知ってもらおう紙芝居、アルバイトをしている店の商品の一部購入し、交流の機会に用いることとした。

【1次訪問】

現地の子どもたちとの交流、受け入れ先様との関係形成、2次訪問の際の企画会議、常吉地区のフィールドワークを行った。

子どもたちとの交流は主に、カードゲームやボードゲーム、子どもたちに地元を散歩しながら紹介してもらうなどをして、常吉と子どもたちと知ることに努め、その上で、2次訪問時に開くイベントについての会議を行った。

当初は、私たちからの案を幾つか提案したが、様々な意見がでて統合していく形で、子ども百貨店を以前とは異なる形、具体的には、子どもたちのできることや、得意なことを活かした教室形態のイベントという方向性になった。

イベントの内容は、ゴム鉄砲制作、イラスト制作、毛糸のマスコット制作、ピアノ教室、大学生との制作イベントであり、これらをつねよし百貨店の一画をお借りして、行うことが決まった。続いて、こういったイベントを行うことについて、評価や対価を如何様にするかという問題となり、当初は、各イベントに金額を設定すること、イベントに参加するパスポート形式等の案が持ち上がり、それらに相応しい金額について議論が盛り上がった。しかしながら、子どもたちを中心としてイベントを開催するという事は、客層の多くも同年代が多くなることが考えられることから、金銭を受け取るか否かについては、一時保留をし、1次訪問は終了した。

【2次訪問に至るまでの準備期間】

準備期間で行ったことを主に、次回訪問にて開催するイベントについて受け入れ先様に報告、報告後、イベントトータルの時間設定決め、当日の人員割当・時間管理用紙の制作、次回イベントに使用する材料の調達、イベントチラシ・ポスター作りを行った。

【2次訪問】

2次訪問は4日間にわたり、1日目は子ども百貨店の事前準備、2日目は子ども百貨店の実施、3日目・4日目についてはつねよし百貨店における作業の手伝いを行った。

1日目の子ども百貨店の事前準備については、午後から子どもたちに集まっていたき、看板の作成や、店舗内に設置されている黒板の飾りつけ、イベントのポップづくり、百貨店内で販売している商品のうち、おすすめしたい商品のポップづくりを行った。なお、事前準備については、私たちは日をまたいでも行った。

2日目、子ども百貨店当日。当日になり金銭の如何について、今回行うイベントの支援費という形でお金を募ることとなった。また、前日にやり残した、店内の装飾や各教室の準備を行い、午前10時より子ども百貨店が開始した。

10時台にはお客様はあまり見えなかったが、11時から13時にかけて多くのお客様に来ていただいた。子どもたちについては、みんなが来訪した方に当人たちが提供するサービ

スについて説明することに苦勞する間もなく、淡々とやり遂げ、非常に人が入った時間帯であっても十分に個々の役割を担っていたという印象を受けた。その上で私たちチームの反省点としては、来訪される方の多くが子どもたちと同世代の子たちが多くを占め、そのような子どもたちにも何かイベントの手伝いに積極的になってもらえるような声掛け等ができなかったことは省みるべき点として上がられる。しかし、イベントを総括しても想定上のお客様（61人）に来ていただき、また、募金形式で調達していた活動資金では3891円も集めることができ、イベントに掛かった費用を上回ることができた。集まった費用は、後日子どもにプレゼントに変えて手渡した。

3日目・4日目は主に、つねよし百貨店の仕事のお手伝いということで、米の精米、梱包作業を行った。私たちの手伝いは食の流通の一端のさらにごく一部であったが、慣れない作業であったため時間がかかってしまった。もちろんそれについての反省もあるが、一方でこの作業が私たちの手元に商品が届くまでに、幾重の人の時間が費やされているということをリマインドさせる機会であったこと、また肉体的に作業の負荷等を経験できたことが、さらに負荷の掛かる作業を担っておられる農家の方々の凄みを感じ、あたまが上がらない気持ちで溢れた。

【プロジェクト振り返り】

プロジェクト目標である「地域に育つ子どもたちにとって有意義な未来のために」のために、今回行った子ども百貨店が貢献できたか、当性、有効性、効率、インパクトの4つの観点から振り返る。

まずは妥当性の観点。子ども百貨店を行うに至るまで、8月には新型コロナウイルス感染症の感染者数が増加していく中で、交流の機会を設けていくこと、また市外からの大学生が訪問することについて、また、中学生がイベントに参加してくれるのかといった不安要素があったが、ソーシャライズな資源であるつねよし百貨店というコミュニティセンターを活用でき、またイベント自体も交流を通じた計画・実行できた点は評価できる。また、その結果として想定上の良い反応が得られたので、子ども百貨店を行ったことはプロジェクト目標について妥当なものであったと評価できる。

次に有効性の観点については、子ども百貨店についての参加して下さった子どもたちに交流の機会の中で、うまく聞き出せたらと考えていましたが、具体的な声を聞くことができなかった。しかしながら、東田さんの評価として子ども百貨店を行ったことが結果として子どもたちに変化がみられ、家庭でも子ども百貨店の出来事が話題に上がることもあったようで、楽しい思い出をもたらせたという点で有効性が認められた。

また私たちは、常吉地域で暮らす子どもたちが自分達の地域をどのように思い、どうあってほしいと願っているのか深く聞き出すことはできなかったが、「何もない」、「人が少ない」など否定的な言葉を何度か聞く機会があった。こういった子ども時代に感じた負の意識が、現在のUターン者がいないという現状に繋がっていると私たちは考える。今回

の子ども百貨店というイベントが子どもたちの記憶の中で楽しかった思い出として残り、地域を好きになるきっかけの一つとして位置付けられていれば、私たちのプロジェクトの究極目標である「地域で暮らす子どもたちにとって有意義な未来のために」は達成されており、イベントは有効的なものだったと言える。

続いて効率については、ZOOM や LINE 等を用いて、対面にとどまらずハイブリッドな形態で連携をとることができ、コロナウイルスが蔓延している渦中であっても、適切な頻度にて連絡、報告ができていた。また、人を集める手段としてチラシやポスターを制作したことについては、一瞥で内容を伝えることができる点で効率的であった。また、企画会議自体も、子どもたちとの交流を重視して行われたことで、無駄な時間を省くことができた。

最後に子ども百貨店のインパクトについてだが、今回行った形態が子どもたちのできることや得意なことを基礎に成立しているので、成長を見る機会であったり、違った一面を見る機会であったりと、多方面に影響があったのではないかと、また、大学生が参入することによる子どもたちのキャリア形成にも、大学生の一部のビジョンを見せることができたのではないかと考えられる。一方で、今回の子ども百貨店は常吉地区の全世代を巻き込んで行われたわけではないため、多様な影響を与え合える機会であったとは言い難いが、当イベントが子どもたちにとっても私たちにとっても総合的な経験として評価できるものであった。

【さいごに】

今回のインターンシップに参加させて頂いたことで、はじめて、限りあるものの中から、いい方向に向かっていけるような計画を練ることの難しさを体感し、計画や小さな目標を軌道がずれていくたびに、変更を加えていく過程での混乱した状態も経験することができた。恐らくだが、学生としてこのような経験をできることは稀有であり、今後相似した出来事にぶつかったとしても、この経験を活かし、進むことができるような自信を持つことができた。改めて、殊勝な経験をさせていただいた、つねよし百貨店実行員会東田様、インターン活動を支えてくださったコンソーシアム京都の職員の方々並びに野村先生に感謝申し上げます。